

‘界面’の意味と由来について

成昊慶Seong Hogyongソン・ホギョン(西江Seogangソガン大学名誉教授)

【訳者注】ハングルには現代語の場合は韓国文教部旧方式(ただし転字)により、それ以外では基本的に中期語の音を加味したローマ字(転字)を加える。必要に応じて現代語のおおよその発音をカタカナで付ける。

1. 序言

この論文は高麗後期の詩歌作品 <處容歌> (作者未詳) と伝統音楽の 樂調名(「界面調」)そして巫俗(「界面꺾gusクツ*」等)で用いられた「界面」の意味と由来を一元的に把握し得る可能性を模索することである。

* 【訳注】「꺾gusクツ」は朝鮮のムーダン(シャーマン)の祭祀。

1493年(李朝成宗23)に成俔等が王命によって編纂した樂書『樂學軌範』卷5の「鶴蓮花臺處容舞合設」に <處容歌> (全44~45行)が載せられているが、その中に「界面」という言葉が出て来る。

[前腔] 新羅盛代(신라성대[sin-ra-syøŋ-dæi]) 昭盛代(쇼성대[syo-syøŋ-dæi]) / 天下太平(턴하대평[tyən-ha-dai-pyøŋ]) 羅‘候’[侯]德(라후덕[ra-hu-dæg]) 處容(처용[cyə-yoŋ]) 아바[aba] / 以是人生(이시인상[i-si-in-søiŋ]) 애[ai] ‘相’ [常]不語(상블어[syaŋ-bur-ə]) ㅎ시란대[he-si-ran-dæi] / 以是人生(이시인상[i-si-in-søiŋ]) 애[ai] ‘相’ [常]不語(상블어[syaŋ-bur-ə]) ㅎ시란대[he-si-ran-dæi]

[附葉] 三災八難(삼재팔난[sam-jæi-par-ran]) 이[ɪ] 一時消滅(일시소멸[ir-si-syo-myøŋ]) ㅎ샷다[hæsya-sda]

[中葉] 어와[əwa] 아비[abui] 즈[ʒu] ‘Δ|zi’ [이] [i] 여[ye] 處容(처용[cyə-yoŋ]) 아비[abui] 즈[ʒu] ‘Δ|zi’ [이] [i] 여[ye]

[附葉] 滿頭插花(만두삽화[man-du-sab-hoa]) 계[gyæi] ‘오’ [우] [u] 샤[sya] 기울어진[giur’əsin] 머리[me]ri’yæi

[小葉] 아우[au] 壽命長‘願’[遠](슈명당원[syu-myøŋ-dyaŋ-uøn]) ㅎ샤[hæsya] 넘거신[nəbgəsin] 니마해[nimahai]

…… [後腔]~[小葉]の 6行 ……

[大葉] 白玉琉璃(백옥류리[beig-og-ryu-ri]) 꺾[te] [ge]ti ㅎ[hei] ‘여’ [어] [æ] 신[sin] 닛바래[nisbarai] / 人讚福盛(인찬복성[in-can-bog-syøŋ]) ㅎ샤[hæsya] 미나

거신minagəsin ‘툑애təg’ai’[툑개təgai]/ 七寶(칠보cir-bo) 계우샤
gyəiusya 숙거신suggəsin 엇게예əsgəiyəi/ 吉慶(길경gir-gyən) 계우
샤gyəiusya 늘의어신nur’wi’əsin 수맏길혜səmaisgirhyəi

[附葉] 설sar’의muir’[의mei] 모도와modooa 有德(유덕yu-dəg) ㅎ신həsin
가수매gasəmai

[中葉] 福智俱足(복디구족bog-di-gu-jyog) ㅎ샤həsyə 부르거신buurtugəsin
뵤예bəiyəi/ 紅鞞(홍뎡honḍyən) 계우샤gyəiusya 굽거신gubgəsin
허리예həriyəi

[附葉] 同樂大平(동락대평doḅ-rag-dai-pyən) ㅎ샤həsyə 길어신gir’əsin
허튀예hətuiyəi

[小葉] 아우au 界面(계면gyəi-myən) 도꺾샤dorešya 넓거신nəbgəsin 바래
barai

…… 以下22行 ……

※ ‘ ’ 標示の後の [] の中は編纂者と編纂年代未詳の『樂章歌詞』での異
表記であり, () の中の漢字音も樂章歌詞に表記されたものである.

熱病神を防いだり退治する神的な人物である處容の非凡な姿を語る 一節
の終わりで “界面도꺾샤dorešya 넓거신nəbgəsin 바래barai” (계면gyemyeon
도셔셔dosyeoseo 넓으신neolbeusin 발예bale[界面お廻りなさって広くていらっ
しゃる足で])というものである.

この言葉を「音楽の界面調」と解釈することにしたのだが(「界面調gye-
myeonjo [ケミョンジョによる踊り]」¹⁾等), 「界面調」はわびしく悲しい楽調
「界面」(ある楽曲の音組織の特徴を表す旋法[mode]またはある旋法に現れる中
心音の高低を表示する調[key])²⁾という点以外は意味と由来が分からなかった.
そして韓国東海岸地域の別神굿byeolsingusピョルシングッの中の「界面굿gye-
myeon’gusケミョングッ」(「제면굿jenyeon’gusチェミョングッ」, 「제민굿je-
min’gusチェミングッ」)とも言い, 巫祖神である계면할머니gyemyeonhalməoniケ
ミョンハルモニ [ケミョン婆さん]の内歴等を明らかにする)及びソウル, 京畿
Gyeong’giキョンギ地域における「계면거리gyemyeon’georiケミョンコリ*」と関連
して, ムーダンが당골네dan’golneタンゴルレ(特定のムーダンと信徒関係を結ん
でいる人々)の家に乞粒[동냥dongnyangトンニャン物乞い]することを
「계면돌다gyemyeondoldaケミョンドルダ[ケミョンを廻る]」と言い, 계면굿
gyemyeon’gusケミョングッが終わった後굿당gusdangクッタン[クッの堂]に集ま
った人々に分け与える餅を「계면떡gyemyeonddeogケミョントク[ケミョンの餅]

と呼んでいる。(その「계면gyemyeonケミョン」という言葉は「女のムーダンの祖先や祖霊」を意味すると見ている)³⁾

*【訳者注】「거리georiコリ」はムーダンの祭祀の一区切り。

このように詩歌と音楽そして巫俗でともに用いられる「계면gyemyeonケミョン」の意味や由来に関する説明は不分明でもあり、他の分野では通用しにくいこともある。その「界面도_도샤dorešya」と「界面調gye-myeonjoケミョンジョ」における「계면gyemyeonケミョン」が同じ意味の言葉であるかどうか不明であり、またそれが「계면굿gyemyeon'gusケミョングツ」及び「계면떡gyemyeon-ddeogケミョントク」, 「계면돌다gyemyeondoldaケミョンドルダ」等における「계면gyemyeonケミョン」とどんな関係を持つのかという点も明らかにされていない。

このような「계면gyemyeonケミョン」の意味と由来を一元的に明らかにし得るならば、これは朝鮮の古典詩歌研究には勿論、伝統音楽研究と巫俗にも助けとなるであろう。

このために、筆者は古典詩歌研究者として言語学の門外漢でありながらも、言語学的な面を中心としてそのような可能性を模索しようと思う。

2. <處容歌>における「界面」とモンゴル語 'gem-iyen'

「界面調」を李朝時代に「啓眠調」(趙慶男, 『亂中雜錄』, 「戊子」)⁴⁾ または「戒面調」(朴汝樑, 『感樹齋集』卷6, 「頭流山日録」)⁵⁾ともいったが、その「界面」は漢字語ではない言葉の借字表記だとするのであろう(諸橋轍次, 『大漢和辭典』, 東京:大修館書店, 1968と辭海, 臺北:臺灣中華書局, 1979等にも「界面」という単語が載っていない。⁶⁾ また中国の口語(白話)でもこの言葉を見つけにくい。そして『樂學軌範』の詩歌の記録ではほぼ朝鮮の固有語を漢字で借字表記していないので、この言葉を固有語と見るのも難しい。

漢字語も中国の口語(白話)でもなく朝鮮の固有語と見るのも難しいこの言葉は高麗及び李朝で外国語を借用して音借表記したものである可能性が大きい。

「界」と「面」の音は反切法で「居拜切」(諸橋轍次, 前掲書, 卷7, 1086ページ)または「皆隘切」(『辭海』, 1968ページ)等と「彌箭切」(諸橋轍次, 前掲書, 卷12, 140ページ)または「密彦切」(『辭海』, 3157ページ)等である。朝鮮では1527年崔世珍著『訓蒙字會』での「界:갸ges:계gyei」(叡山本上3b, 東中本上6a), 「面:면nes:면myen」(叡山本上13a, 東中本上24b)以来「계gyei」と「면myen」であるが、1449年世宗作<月印千江之曲>には「개gai」(其12, 21, 48等)と

「면myŏn」(其159, 164)と表記されている。そして14世紀初葉の中国では「界」が‘kiai’に近い音(「擬音」), 「面」が‘mien’に近い音だったという。⁷⁾これから見て、高麗後期に「界面」の音は「개면gaimyŏn」に近かったものと推定される。

この「界面」がどのような性格を持った言葉かについて推論してみることにする。

<處容歌>において「界面」は處容を讚えるいろいろな表現のうちの一つの中に現れる。それ故その言葉を含む句「界面(계면gyeŏn-myŏn) 도^ㅁ사dorŏsya 녁거신nəbgəsin* 바래barai [界面お廻りなさって広くていらっしゃる*足で]」は讚えるに値する肯定的な内容である可能性が大きい。「足が広い点」が讚えるに値する、または「足が広い理由」が讚えるに値するところであるが、ほぼ「足が広い点」は動作等で安定感を持ち得はしようが、称賛の対象とはならない(むしろ足が大きければ、「도둑놈 발 같다dodugnom bal gatda [泥棒の足のようだ]」という否定的な諺がある)。それ故讚えるに値することは「足が広い理由」というであろう。

*【訳者注】朝鮮語は、日本語とは異なり、尊敬すべき人に属する無情物の動作、状態を表す用言もまた尊敬形となり得る。

「발이 넓다bali neolbda(너르다neoreuda) [足が広い]」は「알아서 사귀는 사람이 많아 다니는 곳의 범위가 넓다 alaseo sagwineun sarami manha danineun beomwiga neolbda [親しく付き合う人が多くて歩く範囲が広い]」⁸⁾という意味の慣用句として広く用いられる。しかし「넓거신 발nəbgəsin bal [広くていらっしゃる]」は處容の広い足を「널리 다녔기 때문에 넓어졌다 neolli danyeossgiddaemune neolbeojyeossda [広く歩き回ったので, 広がった]」と言ったものと見るのが穩当である。動詞「돌다dolda」はいろいろな意味を持つが、主要なものとして「① 物体が一定の軸を中心に丸く動く。② 噂やはやり病の類が広がる。③ 一定の範囲の中で順番に立ち寄り, 転々とする(あちこち歩きまわったり移っていく)。」等がある。そのうちで「발이 넓다bali neolbda [足が広い]」の意味とよく呼応する意味は ③ であり, 「[...을eul /...으로euro] 돌아다니다doladanida ([...]を歩き回る)」と同じであろう。それ故尊敬の先語末語尾「-시--si-」が用いられた点から見て「돌다dolda [廻る]」と「넓다neolda [広い]」の主体がみな「處容またはその足」と判断される中で, 「계면 도셔서 넓으신 발gyemyeon dosyoseo neolbeusin bal [ケミョンお廻りになって広くあられる足]」は「계면을gyemyeoneul (または 계면으로gyemyeoneuro) 돌아다니셔서 doladanisyoseo 넓어지신 neolb-eojisin 발bal [ケミョンを歩き廻られた広いおみ足]」である可能性が大きいと言い得る。

続いて「계면gyemyeonケミョン」はある場所(または方向)を指した言葉

(「도셔서 dosyeoseo [お廻りになって]」の目的語または副詞となる)である可能性が大きい。どんな場所(または方向)だったろうか?

處容は新羅憲康王の時(875~886年)以後李朝まで疫神、疫病神をあらかじめ防いだり退けなくす神的な人物だった(『三國遺事』卷2,「處容郎望海寺」における「この時疫神が姿を現してその前にひれ伏して曰く:わたしは公の奥方を欲し、すでに犯しました。公が怒りをお示しにならず、甚く感じ、うるわしく存じます。誓って今後公のお姿を描いたものだけを見てもその門に入りません。」と言った。これにより、国の人々は門に處容の姿を張って邪鬼を払って慶事を迎えようとした。)⁹⁾ 参照)。そのような疫神、疫病神の予防者または退治者が歩き廻った主たる空間は疫神、疫病神がいるか、現れる場所(または方向)であったろう。疫神と疫病神は疫病(全身的な症状を表し、集団的に発生する急性伝染病)と疫病(熱の激しい病気で、主に腸チフスまたは染病をいう)を指す存在を神格化した言葉である。それ故處容が歩き廻った主たる場所(または方向)は疫病、熱病が発生した場所やその兆候があるところだったであろう。

これで見れば、「界面」は疫病、熱病と緊密な関係を持った言葉だった可能性が少なくない。

<處容歌>が作られたであろうと推測される13世紀後半または14世紀にはモンゴル人の支配下の中国等の地でモンゴル語の語彙が少なからず用いられ、高麗がモンゴルと約30年間抗争し、1259年(高宗46)に降伏してその属国となり、モンゴル[元]との文物交流が活発になった13世紀後半から高麗にもモンゴル語の語彙が相当数流入して用いられた。¹⁰⁾

当時のモンゴル文語(13世紀から20世紀までUighur系モンゴル文字で表記された文書でだけ使用された東モンゴル人の文語であり、古代モンゴル語の一つであり、音韻の発達で12世紀までの古代モンゴル語の段階でとどまる)¹¹⁾と中世モンゴル語(13~16世紀の間のモンゴル語群の口語)に疫病、熱病と緊密な関係を持つ「계면 gemyeon ケミョン」と音および意味がすべて近い言葉で、'gem'に格助詞(格語尾) '-iyen'が附いた形である 'gem-iyen'がある。

boyda sayi-d öber-ün gem-iyen üje-yü mayu-i kümün busu-d-un gem-i eri-yü
holy good-PL self-GEN fault-REFL see-GN bad-PL person other-PL-GEN fault-ACC seek-
GN성스러운 사람들은 자신의 잘못을 보고, 악한 사람들은 남들의 잘못을
찾는다.[聖人は自己の誤りを見, 悪人は他人の誤りを探す] [Erdeni-yin Sang:
§109]¹²⁾

ここで 'gem' (音は 'gem'に近い)は「결함 gyeolham [欠陥]; 병 byeong [病氣], (가볍거나 만성적인 gabyeobgeona manseongjeogin [軽いか慢性的な]) 질병 jil-

byeong [疾病]; 잘못jalmos [誤り]; 해로움haeroum [害]; 죄악joeag [罪惡]」等の意味を持つ名詞である。¹³⁾ この言葉はクビライ・カンの時(1260~1294)からモンゴル(元)上層部の主要思想となっていたチベット仏教の著述を翻訳したところでは主に「잘못jalmos [誤り], 해로움haeroum [害]」の意味で用いられたが, 「병byeong [病氣], 심각하지 않은 질병simgaghaji anheun jilbyeong [深刻でない病氣]」の意味でも用いられ(一般の疾病を意味する言葉としては‘ebedčün’等が多く用いられた)¹⁴⁾ 共通チュルク語群(Common Turkic)の*‘kem’(병byeong [病氣])と関係あることが分明であるという。¹⁵⁾

その後ろの‘-iyan/-iyen’(その前の体言との母音調和による)は体言の格変化(曲用)で子音で終る体言の後ろに用いられるやっかいな用法の再帰-所有格助詞(the reflexive-possessive suffix)であり, 母音で終る体言の後で用いられる‘-ban/-ben’と同じであり, モンゴル文語で対象と他の対象(あるいは行為)との関係を表示するだけでなく, その対象が行為者(人)に属するという点も表示する(格表示の他にも「제je [自分の], 自己의eui [の]」の意味を表す). 主格(nominative)はなく, 主に対格(accusative)や属格(genitive)として用いられ(対格として用いられれば‘-ban/-ben’とは異なり対格助詞‘-i’や‘-yi’と結合しないが, 属格として用いられる場合は通常の属格助詞‘-un/-ün’や‘-yin’と結合して‘-ün-iyen’等となったりする), 与-処格(dative-locative), 奪格(ablative), 具格(instrumental), 共格(comitative)の格助詞と結合もする。¹⁶⁾ また場所副詞までもこの格助詞をと取り得るが, この場合その副詞は行為者がいる場所や行為者が移動して向かうところを示すという。¹⁷⁾

そして朝鮮で18世紀に著述されたモンゴル語会話教本『蒙語老乞大』¹⁸⁾で‘gem’は現れないが, 再帰-所有格助詞‘-iyan/-iyen’は‘- | 연-iyən’と諺文(ハングル)表記され, ‘-ban/-ben’と同じく主に対格で用いられ, 属格で用いられた例も一つある(口語形は‘-an/-en’で主に属格として用いられる).

qayas-*iyen* ‘하갓- | 연hagas-iyən’ 半을ur [を](老7-22a)

ed-*iyen* ‘얼- | 연əd-iyən’ 던량을tyənryaḡur [財産を](老7-17b), 物貨를rer [を](老8-14b, 8-15a)

eme-e keüked-*iyen* ‘어-며 쿠크- | 연əmə kəukəd-iyən’ 妻子息을ur [を](老7-22a)

ger-*iyen* ‘걸- | 연gər-iyən’ 집을jibur [家を](老7-22b)

kergem-*iyen* odun ‘컬검- | 연 오돈kərgəm-iyən odon’ 官星이i [を](老8-20a)

doturan ‘도토란dotoran’ 속이sogi [中が](老7-18b)

öberen ‘위버런wəbərən’ 제jəi [自分の](老3-5b), 손조sonjo [自分で](老4-8b), 몸소momso [自ら](老4-17a), 自己(老7-11b)¹⁹⁾

このような ‘gem-iyen’ の意味と機能は前に推論した<處容歌>における「界面도ᄃᆞᆫ샤dorəsyā 넓거신nəbgəsin 바래barai [界面お廻りなさって広くていらっしゃる足で]」の文脈の中で「계면gyəimyeonケミョンがなんらかの場所(または方向)を指す言葉(目的語または状況語となる)である可能性が大きく、疫病、熱病と緊密な関係を持つ言葉であった可能性が小さくない」という点とほとんど一致する。それ故 <處容歌>における「界面」はモンゴル文語または中声モンゴル語の ‘gem-iyen’ の音借用表記である可能性が小さくないとすべきである。

ところでモンゴル文語で多くの副詞が名詞(そして代名詞と数詞)起源であったが,²⁰⁾ ‘gem’や‘gem-iyen’が場所副詞としても用いられたかは確認が難しい。その上関連する対象が行為者に属さないか行為者と関係ない場合はその再帰-所有格助詞を用い得ないという(その対象の所有者を名詞や人称代名詞の属格で表示する)。²¹⁾ このため、‘gem-iyen’を「gemのあるところを」とか「gemが移動する方向に」とははっきりと判断するのが容易ではない。

モンゴル文語文法における再帰-所有格助詞 ‘-iyen’ の正確な用法から見ようとすると、‘gem-iyen’を借字表記した言葉としての「界面」は<處容歌>で「도ᄃᆞᆫ샤dorəsyā [お廻りなさって]」の行為者(主体)である處容に属する対象でなければならないだろう。しかし、「계면 도ᄃᆞᆫ샤dorəsyā」をこれに合わせて「처용 자신의 잘못을 돌이켜서(반성해서)Cheoyong jasineui jalmooseul dolikyeoseo (banseonghaeseo) [處容自身の誤りを振り返って(反省して)]」と見ることはその後ろの「발이 넓은(넓어짐) bali neolbeum (neolneojim) [足が広い(広くなること)]」の理由として不適合であり、後先がよく合わない上に、讚えるための表現としても見劣りがする。そして「병이 돌아서(퍼져서)byeongi dolaseo (peojyeoseo) [病気が回って(広がって)]」と見ることは ‘-iyen’ が主格としては用いられず、その病気が處容のもの(處容のかかった病気または起こしたか広げた病気)でない上に、「발이 넓은 이유 bali neolbeun iyu [足が広い理由]」がはっきりと提示されておらず、その後ろの言葉との論理的緊密性が足りなくなってもいる(尊敬の先語末語尾 ‘-시- -si-’ の用法からも問題となり得る)。

朝鮮では18世紀まで朝鮮語の統辞構造に引かれてモンゴル語の格助詞(格語尾)の誤用が多かったという。²²⁾ しかし13世紀後半または14世紀に作られた<處容歌>において再帰-所有格助詞 ‘-iyen’ のやっかいな用法についての正確な知識の不足や朝鮮語統辞構造の影響等によって、モンゴル語 ‘gem-iyen’ を朝鮮語の構文の中で不正確に使用したことがあり得るといえよう(あるいはモンゴルにおいてさえ中世モンゴル語時代である13~16世紀の口語では文語におけるそのようなやっかいな用法が守られなかった可能性も排除し得ないだろう)。

この言葉は元代(1271~1368)に大モンゴル国の創建者チンギス・カーンの次位の非常に大きな権威を持ったクビライ・カン(元帝国創建者・高麗忠烈王の岳父、忠宣王の義祖父・高麗の国体と土風を維持し得るようにし、高麗上層部の政治的支柱となった)の後援で作られたチベット仏教格言集(道德指診書)のモンゴル語訳で主要な語彙として用いられたので('gem'が格変化した言葉の中で最も多く使われた²³⁾), 元の宮中とその周辺の上層部(高麗の国王たちと上層部の一部も含まれる)に重要な語彙としてよく知られたことはあり得る。これによって、高麗の宮中と上層部の社会でモンゴル文語文法上のやっかいな用法に正確に合わせないのにかかわらず、この言葉が活用されていたことはあり得る。

このような点をすべて考慮すれば、<處容歌>における「界面」は、その再帰-所有格助詞 '-iyen'がモンゴル文語文法における用法にきちっとは合わないが、モンゴル文語や中世モンゴル語の 'gem-iyen'を借字表記したものである可能性が大きく、その意味は「병이 있는 곳을 byeongi issneun goseul [病のあるところを]」(目的語)が的確であると判断する。處容は熱病を予防したり退治するために「병이 있는 곳을 byeongi issneun goseul [病のあるところを]」広く歩き回ったので足が広い(広くなった)と言ったのであろう。

他方「界面」は 'gem-iyen'を 'ge'と 'miyen'に分けて借字表記したわけであるが、これは 'gem'を表記し得る漢字が明瞭でないからだったであろう。

<處容歌>で處容は熱病を予防するか退治するために疫病神を求めて足が広くなるほど歩き廻るが、熱病神は彼を避けて行く(「山이여 iyə[も] 밋히여 mēhiyē [野も] 千里外에 yəi[に]/ 處容아비를 abirer[を/から] 어여 əyə[離れて] '려 ryə' [녀 nyə] 거저 gəjyə[行くや]'/ 아으 aw[ああ] 熱病大神의 ui[の] 發願이 샷다 isyasda [であられることよ]」における「熱病大神」は處容を避けて行く熱病神を皮肉る反語的表現であろう)。このため、熱病神を捕まえさえすれば「膾入갓 s-gas」(횋감 hoesgam [なますの素材])のように包丁で細かく刻んでおいしく食べてなくしてしまうであろう處容に叙述者(narrator)が「무엇을 즐까요? Mueoseul julggayo? [何をあげましょうか?]]と尋ねるや、彼は「千金七寶도 do[も] 말오 mar'o[やめて] / 熱病神을 ur[を] 낚 nar[わたしに] 자마 jaba[捕まえて] 주쇼셔 jyusyosyə[下さい]」(「열병신을 내게 데려와 달라 Yeolbyeongsineul naege deryeowa dalla [熱病神をわたしのところに連れて来てほしい]」)と答えるのである。

ところで熱病神が處容を避けて行き、處容は彼を探し出す(捕まえる)ことが難しい。それで處容は熱病神の徴表(stigma, mark)として熱病の病斑を比喻した「뫋 meoj [サクランボ]・오얏 oyas [スモモ]・綠李²⁴⁾」に向かって速く出て来て屈服(「신코를 맴 sinkoreul maem [履物のひもを結ぶ]」は屈服での代表的な行動である '머리 숙임 meori sugim [うなだれる]」と「무릎 꿇음 mureup ggulheum [膝まづく]」

たのが、1610年に梁德壽が編纂した『梁琴新譜』等に用いられた4調である‘平調、羽調、平調界面調、羽調界面調’では羽調と区別されるものとして現れた(そのうち「平調界面調」は「平調 keyの界面調旋法」であるという)。そして판소리pansoriパンソリ音楽では羽調とともに旋法的概念ではなく唱法的概念(「聲音」として用いられたと見ることもあり、旋法と見ることもある。²⁷⁾このような概念の変遷と混乱にもいかかわらず、界面調が「구슬픈guseulpeun[もの悲しい](처량하고슬픈cheoryanghago sculpeun[わびしく悲しい])楽調」という点は変わらなかった。

しかし「界面」の原語の語根と推定されるモンゴル語‘gem’には‘구슬픈guseulpeun[もの悲しさ]’の意味はない。

ところで先に考察した通り、モンゴル語‘gem’が持つ主要な意味の中で「잘못jalmos[誤り], 해로움haeroum[害]」がある。このような意味の‘gem’に再帰-所有格助詞を付けた‘gem-iyen’は‘-iyen’が持つ属格としての機能によって「(제je, 자기의jagieui[自分の])誤り(または해로움haeroum[害])의euiの」のような連体修飾語となり、これは「잘못된jalmosdoen[誤った](または해로운haeroun[害ある])」の意味で解釈され得る(これまた‘-iyen’が不正確に使用されたものである可能性も排除し得ない)。²⁸⁾‘gem-iyen’が高麗と李朝で「界面」と音借表記された可能性が大きいから、高麗後期及び李朝時代の音楽における「界面調」はこのような‘gem-iyen’の意味による「잘못된jalmosdoen[誤った](または해로운haeroun[害ある])楽調」を意味した可能性が少なくないとした。²⁸⁾

先の引用文における安平大君李瑢の言葉のように、ほとんどすべてが儒学徒だった李朝時代の士大夫たちはもの悲しい音楽は心を傷つけるので、「즐거우면서도 음란하지 않고, 슬프면서도 마음을 상하게 하지 않는다 jeul-geoumyeonseodo eumranhaji angho, seulpemyeonseodo maeumeul sanghage haji anhneunda[楽しくありながらも淫乱ではなく, 悲しくありながらも心を傷つけない](樂而不淫哀而不傷)。(論語,「八佾」)とした孔子の芸術観に背く間違った音楽(または正しくないか害ある音楽)という観念をはっきりと持っていた。これ故にその「잘못된jalmosdoen[誤った](または해로운haeroun[害ある])악조agjo[楽調]」という意味を持つ「界面調」が、いつからかその本来の意味は分からないまま「구슬픈 악조guseulpeun agjo[もの悲しい楽調]」としてだけ認識された可能性がある。

「界面구gusクッ」も本来は‘gem’, ‘gem-iyen’が意味する「병byeong[病氣]」と関連した구gusクッ(「疾病予防구gusクッ」または「疾病退治구gusクッ」)だった可能性があると思われる。近年までの界面구gusクッでも疾病[疫癘または疾疫]の予防や退治の性格が少なからず入っていたのである(その主要目的に「三災를 없앴reul eobsaem[をなくすこと]」がある。²⁹⁾しかしその구gusクッの様相と内歴等がよく分からない状況ではこれについてこれ以上論及しにくい。

4. 結語

先に筆者は高麗後期の詩歌作品 <處容歌>と伝統音楽の楽調名（「界面調」）そして巫俗（「界面ᄃgusクッ」等）で用いられた「界面」の意味と由来を一元的に把握し得る可能性を模索してみたが、その結果は次のように要約される。

その「界面」はすべてモンゴル語の借用語であり、「欠陥, 病気, 誤り, 害, 罪悪」等の意味を持つモンゴル文語または中声モンゴル語の名詞 ‘gem’に再帰-所有格助詞 ‘-iyen’が付いた ‘gem-iyen’を借字表記したものである可能性が少なくない。そのような中で <處容歌>における「界面」の意味は「病気のあるところを」（目的語）が適合しており、「界面調」における「界面」の意味は「誤った(または害ある)」（連体修飾語）である可能性が少なくない。そして「界面ᄃgusクッ」も本来は「病気」と関連するところであった可能性がある。

ところで <處容歌>における「界面」はその原語と推定される言語と推定される言葉の語根 ‘gem’に付いた再帰-所有格助詞 ‘-iyen’がモンゴル文語文法における正確な用法から外れたものと判断され、言語学的知識が浅い上にモンゴル語が分からない筆者としてはその推定の妥当性を申し分なく立証することが困難である。

今後中声朝鮮語及びモンゴル語に明るい方々と朝鮮伝統音楽の理論及び楽曲の分析等に長じている方々そして巫俗をよく知る方々がこの問題に関心に関心を傾けて、この論文における問題点を正し、不十分な点を補完し、よりよい回答を求めてくださるよう期待する。

【注】

- 1) 梁柱東Yang Judongヤン・ジュドン, 『麗謠箋註』(을유문화사[乙酉文化社], 1947), 171ページでは「界面」は楽調名であり、借字であり、原義未詳であるが、<處容歌>では「界面調による踊り」を意味すると見ている。
これに対して李惠求Yi Hyeguイ・ヘグ, 「現行歌曲의[の] 界面調」(1957), 再集録: 이혜구[李惠求イ・ヘグ], 『韓國音樂序説』(서울대학교출판부 [ソウル大学出版部], 1982), 375~376ページでは「界面gyemyeonケミョン」が曲名ならぬ旋法名であるから、そのような意味は通じないとした(<處容歌>の「界面도르샤dorasya」は「諸國을 널리 돌아다니는 것jegugeul neolli doladanineun geos [諸国を広くめぐること]」ではないかと思うとした)。
- 2) 金壽長, 『海東歌謠』(周氏本), 「各調體格」における「界面調 王昭君 辭漢入胡時 雪飛風寒 聲律嗚咽悽愴」, 「界面調 清而遠 哀寃悽愴」等。
- 3) 최성진崔Seongjinチェ・ソンジン, 「계면Gyemyeon」, 『한국민속신앙사전

무속신앙1[韓国民俗信仰事典 巫俗信仰] (국립민속박물관 国立民俗博物館], 2009), 60~62페이지等参照.

- 4) 「戊子(萬曆十六年 宣祖二十一年; 1588年) 春正月…時歌曲 又有樂時調 其聲流連棲楚 其狀搖頭遊項 動身無恥. 又有啓眠調 其聲悲憐哀慘....」
- 5) 「庚戌(1610年) 八月中旬之後… 五日丙午晴… 笛手淪乞能奏戒面調・後庭花・靈山會相・步虛詞等各樸調.]」
- 6) 李瀾, 『星湖僿說』 卷13, 「人事門」 「國朝樂章」における「界面というものは聞く者の涙が流れ, 顔[面]に境界[界]を成すということである(界面者聞者涙下成界於面云耳).」は牽強付会というべきである.

一方現代の化学とコンピューター分野等で用いられる「界面」(「界面活性剤」, 「用戶界面」等)はおおよそ20世紀以後生じた言葉(‘surface active agent’, ‘user interface’ 等)の翻訳として現れた.

- 7) 李珍華.周長楫, 『漢字古今音表』(修訂本, 北京: 中華書局, 1999), 152ページ, 241ページでの「近代音」(1324年に完成した周德清著『中原音韻』等による).
- 8) 신기철 Sin Gi-cheol, 신용철 Sin Yong-cheol編著, 『새 우리말 큰사전 Sae urimal keunsajeon [新朝鮮語大辭典]』(제3차 수정증보 제1판[第3次修正增補第1版], 삼성출판사[三星出版社], 1983), 1347페이지.
- 9) 「時神現形 跪於前曰 ‘吾羨公之妻 今犯之矣. 公不見怒 感而美之. 誓今已後 見畫公之形容 不入其門矣.’ 因此國人門帖處容之形 以僻邪進慶.]」
- 10) 高麗後期の詩歌作品でもモンゴル語の借用がいくらかあった. <鄭石歌> 第4年での「털릭tyærrig」はモンゴル語‘terelig’(‘terlig’; [綿を中に詰めた長い上衣])の借用語であり, <滿殿春> ‘別詞’ 第4聯での「아련aryən」もモンゴル語‘eriyen’(얼룩덜룩한collugdeollughan [まだらな], 줄무늬가 있는julmuneuiga issneun [縞模様のある])の借用語である可能性が大きい(성호정Seong Hogyong ソン・ホギョン, 『한국 고전시가 총론 [韓國古典詩歌總論]』, 태학사[太学社], 2016, 412페이지等参照). そして <雙花店> 第3聯での「드레duræi」もモンゴル語‘torho’(中国で「帖落」と音訳され, 意味は「水桶, 煙突; 맞부딪치다 majbudijchida [ぶつかり合う], 걸리다 geollida [ひっかかる])等の借用と見られるという(정광鄭光Jeong Gwang チョン・グァン・남권희 Nam Gweonheui ナム・グォンヒ・양오진 Yang Ojin ヤン・オジン, 「元代漢語『老乞大』, 『국어학國語学』 33輯, 국어학회國語学会, 1999, 54~55페이지).
- 11) Nicholas Poppe, Grammar of Written Mongolian (Wiesbaden, Germany: Otto Harrassowitz, 1964), pp.1~4 参照.
- 12) Tibetの仏教高僧 Sa-skya Paṇḍi-ta Kun-dga’-rgyal-mtshan(1182~1251) 著 Sa skya Legs bshad (Sanskrit語ではSubhāṣitaratnanidhi; 漢語では‘薩迦格言’と翻訳)を大モンゴル国の qayanにして元の皇帝だった Khubilai Khanの後援で13世

紀末葉頃 Sonom Gara がモンゴル語に翻訳した *Erdeni-yin Sang* (Phags-pa 文字で表記されて出版され、中国では「善説寶藏」と翻訳された) に載せられた格言をのうちの一つだが、その朝鮮語訳は Benjamin Brosig, “Aspect, tense and evidentiality in Middle Mongol,” http://www.academia.edu/10629543/Aspect_tense_and_evidentiality_in_Middle_Mongol, p.11 に載せられた英訳によった。

13) “GEM / ᠭᠡᠮ (キリル文字表記) n. Defect; disease, ailment; fault, mistake; wrong, harm; crime; sin, vice.” Ferdinand D. Lessing, *Mongolian-English Dictionary* (London and New York: Routledge, 2015/1960), p.375.

そして中国の李鋡が編纂した『蒙文総彙』(1891)では‘gem’を‘弊, 情弊’と解釈した(栗林均編, 『蒙文総彙: モンゴル語ローマ字転写配列』, 仙台, 日本: 東北大学東北アジア研究センター, 2010, <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/articles/A51Sosho37.pdf>, 203 ページ)。

14) 特にモンゴル族の一族である Buryat 族の言葉で ‘gem’ は「秘密の病」として知られた「生殖器疾患」を表し、「性病治療」を担当する shaman は ‘*Alia khatun, Gemi-ezhin*’ 等と呼ばれるという。Marina Sodnompilova and Vsevolod Bashkuev, “Diseases and their origins in the traditional worldview of Buryats: folk medicine methods,” *Études mongoles et sibériennes, centrasiatiques et tibétaines*, vol.46 (Paris: Centre d’études mongoles et sibériennes, 2015), <https://emscat.revues.org/2510.pdf>, pp.3~4, p.12.

15) “*gem ‘defect, damage; disease; fault; trouble’. In spite of the unusual *g- apparently related to CT *kem ‘illness’ (cf. EDPT720b).” Hans Nugteren, *Mongolic Phonology and the Qinghai- Gansu Languages* (Rotterdam, Netherlands: LOT, 2011), http://www.lotpublications.nl/Documents/289_fulltext.pdf, p.340 参照. .

16) N. Poppe, op. cit., pp.78~81, §304, §307, §310, §318 等参照.

一方 Shigeo Ozawa, “A Study of Some Reflexive-Accusative Suffixes in Middle Mongolian,” 言語研究47号(東京: 日本言語学会, 1965), https://www.jstage.jst.go.jp/article/gengo1939/1965/47/1965_36/_pdf, 36~46 ページではこれを「再帰-対格助詞(the reflexive-accusative suffix)」とし, 17世紀までの先古典モンゴル文語(pre-classical Written Mongolian)では属格(所有格)としてもよく使われたが, 中世モンゴル語では属格としてはそれほど使われなかったという。

17) N. Poppe, op. cit., p.108, §395.

18) 李喜大と玄文恒が『漢語老乞大』(『老乞大』)をモンゴル語に翻訳して1741年に刊行したものを1766年と1790年に修正した. 이성규 Yi Seong’gyu イ・ソンギュ, 『蒙學三書の[の] 蒙古語 연구[研究]』(단국대학교출판부 [檀国大学校出版部], 2002), 33 ページ参照.

19) 同書, 88~89 ページ.

20) N. Poppe, op. cit., p.56, §205.

21) そのような場合は3人称代名詞の属格 ‘-inu’(単数) または ‘-anu’(複数)が場所副詞とともに使用されるが、これは行為者と一致しないあるものの場所を表示するという。Ibid., p.108, §396.

22) ‘蒙語三書’(『蒙語老乞大』, 『蒙語類解』, 『捷解蒙語』)で格語尾(格助詞)の誤用はたいへん広範囲に現れるのだが、一部の後置詞でのみ格語尾の支配の用法が守られ、大部分は朝鮮語の統辞構造による格語尾が現れるという。이성규 Yi Seong'gyu, 前掲書, 312ページ参照。

23) *Erdeni-yin Sang*では‘gem’が主語として使われた事例が12回であり、その格変化では再帰-所有格形 ‘gem-iyen’が6回で最も多く、対格形‘gem-i’ 4回、属格形 ‘gem-ün’ 2回、与-処格形 ‘gem-dür(tür)’ 1回だった(そのほか、複数形‘gem-üd’ 2回、その格変化形 ‘gem-üd-i’ 1回、‘gem-üd-ün’ 1回、形容詞形‘gem-tü/dü’ 3回だった)。György Kara, *Dictionary of Sonom Gara's Erdeni-yin Sang: A Middle Mongol Version of the Tibetan Sa Skya Legs Bshad: Mongol-English-Tibetan* (Leiden, Netherlands: Koninklijke Brill, 2009), p.116(‘https://books.google.co.kr/books?id=WNRM-xULWYsC&pg=PA116&lpg=PA116&dq=%22Dictionary+of+Sonom+Gara's+Erdeni-yin+Sang%22+%22gem%22&source=bl&ots=ERbSqWMBkq&sig=JwIWxQGASep_1A82YhOoJThIQi0&hl=ko&sa=X&ved=0ahUKEwiF29a0lvHaAhVFfJQKHb_HCP4Q6AEIJTAA#v=onepage&q=%22Dictionary%20of%20Sonom%20Gara's%20Erdeni-yin%20Sang%22%20%22gem%22&f=false’)参照。

24) この3つの果物は東北方言(咸鏡道方言)ですべて「자두jadu(오얏oyas)[スモモ]」の異種であり、大きさが異なり、緑色のところ熟れると各々赤紫、赤、黄の色を帯びるといふ。곽충구郭忠求Gwag Chung'guクァク・チュング, 「육진방언 어휘의 잔재적 성격 [六鎮方言語彙の残滓的性格]」, 『진단학보 [震檀學報]』 125호[號](진단학회[震檀學會], 2015), 201ページ。

そして서대석Seo Daeseogソ・デソク, 「고려[高麗] <처용가[處容歌]>의 [의] 巫歌의 검토[檢討]」, 백영정병욱선생 10주기추모논문집 간행위원회 편 [白影 Baegyeong 페ギョン鄭炳昱Jeong Byeongug 초ョン・비ョン우ク先生10周忌追慕 論文集刊行委員會編], 『한국고전시가작품론 [韓國古典詩歌作品論]1』 (신구문화사 [新丘文化社], 1992), 355ページでは「버찌beojji[サクランボ]・오얏oyas [스모모]」가 「열병[熱病](마마병을 앓을 때 얼굴 등에 나타나는 반점[天然痘

を患った時に顔等に現れる斑点)]」であろうと推測した。

25) 16世紀中葉以前に編纂された『時用郷樂譜』に載せられた高麗俗謡 <思母曲>と <鄭石歌>の樂譜等にも「界面調」と記録されているが、その樂調と樂調名がいつ生じたのかは正確には分からない。

26) 「九月 世宗命世祖與安平大君瑢・臨瀛大君璆學樂. … 嘗於月夜 世祖教伶人許吾笛界面調 羽調俗謂之界面調 聞者莫不哀傷. 瑢謂世祖曰「夫樂者 貴哀而不傷 兄何用界面調也?」 『世祖實錄』 卷1,「總序」 「己酉9月」 條.

27) 이혜구[李惠求], 前掲論文, 359~381 ページ; 이혜구[李惠求]. 임미선 Im Miseon, 『한국음악이론 [韓國音樂理論』 (민속원 [民俗苑], 2005), 117~120면, 123~136페이지等参照.

28) 李得胤(1553~1630)が1620年に編纂した『玄琴東文類記』の中の「答鄭評事書」(1620)で当時はやっておろ、慢大葉に似ているが、淫乱と心を傷つける類の「低昂回互 多有變風之態」の別様調を「北殿 斜調」としたこと(「近年所尙非 慢大葉乃是別様調也 似慢而不慢 慢中有淫 似和而不和 和中有傷 低昂回互 多有變風之態 今之北殿斜調是也」)とその本に載せられた楽譜で「羽調 數大葉」の後ろの曲の名前「斜調 數大葉(羽調界面調也)」に用いられた「斜調」もこれと関連して考察する余地がある.

その言葉は特定の調(key)の名前(「빗가락 bisgarag[横指]」等)を言ったものであり得るが(장휘주 Jang Hwiju チャン・フイジュ, 「許嗣宗數大葉考」, 『한국음악연구[韓國音樂研究』 26집, 한국국악학회[韓國音樂學會], 1997, 189ページ等では『樂學軌範』の羽調に6旨の他に4旨宮である「斜調」があったとした), 「斜」(비끼다 biggida [歪んでいる], 비스듬하다 biseudeumhada [斜めだ], 기울다 giulida [傾いている], 굽다 gubda [曲がる] 等)が 「歪」(기울다 giulda [傾いている], 비뚤다 biddulda [歪んでいる], 바르지 아니하다 bareuji anihada [真っすぐでない])のように「正」に対して対照となる「바르지 않음 bareuji anheum [正しくない](不正)」を意味したりもし(「斜視」, 「斜眼」等), 「北殿斜調 bugjeon sajo」が否定的な調と見做された点等から見て, 「界面調」とほとんど同じく「正調」と比較して「바르지 않은 조 bareuji anheun jo [正しくない調]」すなわち「잘못된 조 jalmosdoen jo [誤った調]」という意味で用いられた可能性もなくはなかったであろう.

29) 2007年に慶尙北道 Gyeongsang Bugdo キョンサンブクト 盈徳郡 Yeongdeog'gun ヨンドクン南亭面 Namjeongmyeon ナムジョンミョン 龜溪里 구계리 Gugyeri クゲリで行われた 별신굿 byeolsin'gus ピョルスングッ[別神クッ]のプロセスの中の 제면굿 jemyeon'gus チェミヨングッにあるように, 韓国東海岸地域における 제면굿 jemyeon'gus チェミヨングッ(계면굿 gyemyeon'gus ケミヨングッ)の後に「제면떡 jemyeonddeog チェミヨントク」を分け与えるのは三災をなくし, 豊漁と息子たちのためだという. 김상보 Gim Sangbo キム・サンボ, 「계면떡 Gyemyeonddeog 케미오톡」, 『한국민속신앙사전무속신앙 [韓國民俗信仰事典巫俗信仰]1』, 63ページ参照.

(菅野裕臣訳)

参考文献

○ 資料

- 一然, 『三國遺事』, 영인본: 민족문화추진회, 1973.
- 世宗, 『월린천강지곡(月印千江之曲) 쌍(上)』, 영인본: 『국어학』 제1집, 국어학회, 1962.
- 『世祖實錄』, 영인본: 『朝鮮王朝實錄8』, 국사편찬위원회, 1980.
- 成倪·柳子光·申末平·朴棍·金福根等, 『樂學軌範』, 영인본: 대제각, 1973.
- 崔世珍, 『訓蒙字會』 (叡山文庫本, 東京大学中央図書館本), 영인본: 단국대학교출판부, 1971.
- 『時用鄉樂譜』, 영인본 대제각 1973.
- 『樂章歌詞』, 영인본 대제각 1973.
- 趙慶男, 『亂中雜錄』, 한국고전종합 .DB ‘<http://db.itkc.or.kr/>’.
- 梁德壽편, 『梁琴新譜』, 영인본: 통문관, 1959.
- 朴汝樑, 『感樹齋集』, 한국고전종합 DB ‘<http://db.itkc.or.kr/>’.
- 李得胤 편, 『玄琴東文類記』, 영인본: 한국국악학회, 1976.
- 李瀼, 『星湖僿說』, 『국역 성호사설 1~12』, 민족문화추진회, 1977~1979.
- 金壽長, 『海東歌謠』, 金三不 교주본, 정음사, 1950.
- 李喜大·玄文恒, 『蒙語老乞大』, 영인본: 서강대학교 인문과학연구소, 1983.
- 李鉉, 『蒙文總彙』 (1891), 栗林均편, 蒙文總彙: 몽골어 로마자 전사 및 로마자 표기법, 仙台, 日本: 東北大学東北アジア研究センター, 2010, ‘<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/articles/A51Sosho37.pdf>’.

○ 辭典, 論著

- 곽충구, 「육진방언 어휘의 잔재적 성격」, 『진단학보』 제125호, 진단학회, 2015, 183~211면.
- 김상보, 「계면떡」, 『한국민속신앙사전 무속신앙1』, 국립민속박물관, 2009, 62~63면.
- 서대석, 「고려 <처용가>의 巫歌의 검토」, 백영정병욱선생 10주기추모논문집 간행위원회 편, 『한국고전시가작품론1』, 신구문화사, 1992, 347~358면.
- 성호경, 『한국 고전시가 총론』, 태학사, 2016.
- 신기철·신용철 편저, 『새 우리말 큰사전』, 제3차 수정증보 제1판, 삼성출판사, 1983.

- 양주동, 『麗謠箋註』, 을유문화사, 1947.
- 이성규, 『蒙學三書의 蒙古語연구』, 단국대학교출판부, 2002.
- 이혜구, 『韓國音樂序說』, 서울대학교출판부, 1982.
- 이혜구·임미선, 『한국음악이론』, 민속원, 2005.
- 장휘주, 「許嗣宗數大葉考」, 『한국음악연구』 제26집, 한국국악학회, 1997, 179~198면.
- 정광 · 남권희 · 양오진, 「元代漢語『老乞大』: 신발굴 譯學書자료 『舊本老乞大』의 漢語를 중심으로」, 『국어학』 제33집, 국어학회, 1999, 3~68면.
- 최성진, 「계면」, 『한국민속신앙사전 무속신앙1』, 국립민속박물관, 2009, 60~62면.
- 諸橋轍次, 『大漢和辭典』, 縮寫版, 東京: 大修館書店, 1968.
- 『辭海』, 臺北: 臺灣中華書局, 1979.
- 李珍華·周長楫, 『漢字古今音表』, 修訂本, 北京: 中華書局, 1999.
- Brosig, Benjamin, “Aspect, tense and evidentiality in Middle Mongol.”
‘http://www.academia.edu/10629543/Aspect_tense_and_evidentiality_in_Middle_Mongol’.
- Kara, György, *Dictionary of Sonom Gara's Erdeni-yin Sang: A Middle Mongol Version of the Tibetan Sa Skya Legs Bshad: Mongol-English-Tibetan*, Leiden, Netherlands: Koninklijke Brill, 2009.
- Lessing, Ferdinand D, *Mongolian-English Dictionary*, London and New York: Routledge, 2015/1960.
- Nugteren, Hans, *Mongolic Phonology and the Qinghai-Gansu Languages*, Rotterdam, Netherlands: LOT, 2011, ‘http://www.lotpublications.nl/Documents/289_fulltext.pdf’.
- Ozawa, Shigeo, “A Study of Some Reflexive-Accusative Suffixes in Middle Mongolian.”
『言語研究』제47호, 東京: 日本言語学会, 1965, ‘https://www.jstage.jst.go.jp/article/gengo1939/1965/47/1965_36/_pd’, f36~46면.
- Poppe, Nicholas, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, Germany: Otto Harrassowitz Verlag, 1964.
- Poppe, Nicholas 저, 유원수 역, 『몽골문어문법』, 민음사, 1992.
- Sodnompilova, Marina and Bashkuev, Vsevolod, “Diseases and their origins in the traditional worldview of Buryats: folkmedicine methods.” *Études mongoles et sibériennes, centrasiatiques et tibétaines*, vol.46. Paris: Centre d'études mongoles et sibériennes, 2015, ‘<https://journals.openedition.org/emscat/2510>__